



JICA海外協力隊 がゆく Vol. 17

野球を通じて、メキシコの子どもたちの心身の成長を手助けする隊員の活動を紹介します。

in メキシコ

金澤達記

かなざわ・たつき 24歳
出身地：兵庫県 職種：野球
任期：2018年10月～2020年10月



コミュニティの人たちと一緒に
野球の楽しさを
伝えています

6歳から野球を始め、教育実習などで野球指導の経験も積んできました。大学在学中に世界野球機構が主催するマレーシアでの野球ボランティア活動に参加。そのとき世界には野球の指導を受けたい子どもがたくさんいるのに、正しい指導スキルを持つ指導者が少ないことを実感しました。

州オメアルカ市から、子どもたちの健全な心身の成長をサポートする野球指導者がJICA海外協力隊として要請されていることを知って応募。派遣が決まりました。2018年から同市市役所のスポーツ振興課に配属され、現在は地域の野球チームと小学校への巡回指導、障害のある子どもに向けた親子運動教室などを行っています。



しっかり
構えよう!

小学校での野球指導の様子。体育の授業として、男子も女子も一緒にプレイする。



障害のある子どもたちとの運動教室で、日本の幼児番組で人気のダンス「エビカニクス」を一緒に楽しんだ。



体は
ボールの正面に

コミュニティの野球チームで子どもたちにボールの取り方を教える金澤さん(右端)。

地域ではスポーツが子どもたちに及ぼす好影響を保護者に説明して野球チームを作り、できるだけ練習を見に来てくれるようにお願いしました。最初、ほとんどの子どもたちはキャッチボールもできない、ルールもよくわからない状態。それでも野球を楽しむ姿を見て応援する保護者も増え、野球経験者が指導を手伝ってくれるようになりました。私の任期が終わっても、野球チームの活動が継続できると感じています。

現在市内に子ども野球チームは10あり、約150人が野球を楽しんでいます。これまでに2度、オメアルカ市少年野球大会を開催。さらに市内で選抜チームを作り、ほかの市のチームと試合も行いました。

チームワークや協調性などを育むことができる球技の楽しさ、達成感などを、残りの任期いっぱい、子どもたちに伝えていきます。

メキシコ事務所からひとこと

近隣地域に派遣されていたJICA海外協力隊の活動を聞いたオメアルカ市の副市長が、子どもたちの成長に日本の若者の力を貸してほしいとJICAに要請したことが、金澤さんの派遣につながりました。金澤さんは野球に対する地元の考え方や技術を取り入れながら、子どもたちに合った指導を行っています。地元のほとんどの人に知られていて、家族のように愛される存在です。



企画調査員(ボランティア事業)*
小島聡成(こじま・としあき)

*隊員の活動全般を支援する「ボランティア事業支援のプロ」。また相手国の要望を調査して要請開拓を行うなど、隊員活動全体の運営を行う。

+one information

多彩な具材が癖になるタコス

メキシコでの生活が決まったとき、食べることが大好きな僕の頭に浮かんだのは、日本のおいしいお米や新鮮な野菜、和食が食べられなくなる、という食事への不安でした。しかしメキシコで暮らしてはや1年3か月。苦手だと思ふメキシコ料理に出合ったことはなく、すべてがおいしいんです!

メキシコ料理は、アステカ族やマヤ族などの先住民族の料理がスペイン料理の影響を受けて成立したといわれています。多くのメキシコ人がよく食べるのが、つぶしたウモロコシで作った生地を薄く焼いたトルティーヤです。トルティーヤ料理はたくさんありますが、私が一番好きなのは、肉や野菜を挟み、好みでライムを搾って食べるタコス。具材は牛・豚・鶏・羊の肉や野菜・卵など多彩です。なかには牛の脳みそ、頭、内臓など、日本ではあまり食べない部位が具材になっているものもあり、最初は驚き、少し戸惑いましたが、いざ食べてみるとこれがまた癖になる味でとてもおいしいんです。

そんなタコスに欠かせないのが、サルサと呼ばれる辛いソースです。どこのお店にもサルサバルデ(緑色のトマトを使ったサルサ)とサルサロハ(赤いトマトを使ったサルサ)が置いてあります。店ごとに材料が異なり、ハバネロをふんだんに使ったサルサは辛さのレベルが違うので要注意です。初めてハバネロのサルサをかけたときには、本当に口から火が出そうでした。サルサは一度少し手にのせて味見してからタコスにかけるのがいいようです。

タコスもサルサも家庭やお店、地域によって味が違います。メキシコにいらしたら、ぜひ本場のおいしいタコスを食べ比べてみてください。(金澤達記)



イラスト●さかがわ成美